

204. 唾液腺スキャンニングの基礎的研究 第2報

—炎症時の $^{99m}\text{TcO}_4^-$ の摂取について—

日本歯科大学 放射線学教室

屋代 正幸 古本 啓一

同 RI 総合研究室 関 孝和

現在使用されている唾液腺スキャンは主に唾液腺腫瘍の診断に使用されている。我々の教室では従来からこの唾液腺スキャンを唾液腺の炎症例にも適用し、急性・慢性炎症の判別にも可能であると思われる所見を得ている。

これらの所見を詳細に検討するために、実験動物を使用し、炎症を惹起せしめ、 $^{99m}\text{TcO}_4^-$ の摂取量と炎症の程度を病理的に検討を行い比較検討したので報告する。

〔研究方法〕実験動物には家兎を使用した。唾液腺に炎症を惹起せしめる方法は、日常この腺の炎症は唾液症によっておこされる頻度が高いため、このことを想定し、ステンノン氏管を結紮し、炎症を惹起せしめた。

ステンノン氏管を結紮後、3日目、7日目、14日目、28日目に $^{99m}\text{TcO}_4^-$ を投与し、60分後に屠殺し、唾液腺（炎症側、正常側の耳下腺、顎下腺）、甲状腺を全摘出し、 $^{99m}\text{TcO}_4^-$ の摂取量を測定し、同試料を病理標本に作成し、比較検討を行った。

〔成績〕1) 炎症初期には、唾液腺への $^{99m}\text{TcO}_4^-$ の摂取は亢進した。2) 炎症が進行するのに従い $^{99m}\text{TcO}_4^-$ の摂取は低下する傾向にあった。3) 腺組織が壊死状態になると $^{99m}\text{TcO}_4^-$ の摂取は認めなかった。

以上の結果から唾液腺炎症の判別診断に $^{99m}\text{TcO}_4^-$ 唾液腺スキャンの判別診断が可能であることが判明した。

205. 唾液腺シンチの利用価値の検討

横浜市立大学 放射線科

小野 慈 朝倉 浩一 伊東 乙正

氏家 盛通 早勢 英俊 菅原 正敏

百瀬 郁光

同 口腔外科

村瀬 博文 杉森 孝志

同 耳鼻科

北村 馨 山口 宏也

$^{99m}\text{TcO}_4^-$ を用いる唾液腺シンチが始められて数年になるが、その安易さにも拘らず当施設における使用率はきわめて低く、シンチグラム検査全体の0.3%にすぎない。利用価値が低いためかどうか自験例を検討したので報告する。

$^{99m}\text{TcO}_4^-$ 1~3 mCi 静注後、20分、60分、の各々につき3方向像を、東芝製ガンマカメラ102型を使用し撮影した。他にシンチスキャナーも利用した。腫瘍19例、炎症性疾患等16例を検査した。

唾液腺原発の腫瘍では、8例中4例が欠損像、腫大像を伴う菲薄像1例、部分的欠損像1例、正常像2例であった。唾液腺腫瘍が疑われた腫瘍（癌の転移5、リンフォーマ3、他3）11例では正常像を呈したのは7例、菲薄像1例、菲薄像を伴う腫大像2例、腫大像1例であった。炎症性疾患では、当該唾液腺が欠損したもの14例中4例、菲薄像5例、正常像2例、時間とともにUp takeの増加したもの2例であった。シエグレン氏症候群の2例の結果は不定であった。

腫瘍における唾液腺シンチの意義は、腫瘍が唾液腺原発か否かの鑑別にあると思われるが、①腫瘍が唾液腺原発でない証明は容易、②原発の確定には難点がある、との印象を持った。炎症性疾患では、機能の有無、分泌の様相を知る目的で行なわれるが、自験14例では様々な病態の唾液腺が含まれていることから、全般に亘っての評価は出来ない。各症例毎にその臨床像と比較検討すると、おゝむね唾液腺の機能とシンチ所見は一致するが、一致しない部分もある。とくに唾液が分泌されない例で、 ^{99m}Tc が正常にUp takeされる例のあることは興味深い。